早稲田大学教育学部　学術研究（国語・国文学編）第56号　15～28ページ，2008年２月

中国における「漢文教育」の特質を探る

―日本の漢文教育の改善に向けて―

丁　　秋　娜

1　はじめに

日本では漢文教育の衰退しつつある現状が深刻化している。中学校や高校での漢文の学習時間が年々削られ，大学入試に漢文を出題する大学も近年減少する一方である。生徒たちの漢文に対する関心度が低いのみでなく，漢文に苦手意識を持つ教員も増加している。

一方，隣国の中国では，文言詩文教学[1]（日本の漢文教育にあたる）は語文教学（国語教育にあたる）で一大領域としての地位が確立されている。中学校と高校の教科書では文言文教材が全教材の30％以上を占めており，学習時間数が国語総時間のほぼ50％を占めている。作品の時代は，戦国時代から辛亥革命まで，三千年以上の時代にわたっている。

本稿では，中国における「漢文教育」を教育課程，教科書，試験問題と指導実践例等から考察し，その特質を明らかにする。その結果を踏まえて，日本の漢文教育に役立てる方策の提案を試みたい。

2　中国の「漢文教育」の特質について

2－1　教育課程から考える「漢文教育」

中国では，2000年から基礎教育の課程改革[2]がスタートした。その時まで各学科の教育目標，内容，方法，教材編纂などを規定していた「教学大綱」[3]が次第に使われなくなり，その代わりに「課程標準」[4]という新しい教育課程が誕生した。文言文教学の語文教学における位置づけについては，「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」（小学校・中学校）と「普通高中語文課程標準（実験稿）」（高等学校）から伺うことができる。以下にその概要を紹介する。

①「全日制義務教育語文課程標準」（小学校・中学校）

小学（６年）・中学（３年）の９年一貫教育カリキュラムが実施されていることが大きな特徴である。また，義務教育の９年間は，第一学段（１－２年），第二学段（３－４年），第三学段（５－６年），第四学段（７－９年）の四つの学段に分けられている。各学段の目標は「識字と写字」「閲読（読むこと）」「作文」「口語交際（話すこと・聞くこと）」「総合性学習」の五大領域に分けられており，文言文教学は「閲読」に位置づけられている。

「課程標準」の「総目標」では，文言文教学の目標として，「辞書などの助けを借りて平易な文言文を読めること」[5]が明確に示されている。また「段階目標」では，それぞれの学段に相応する目標は以下のようになっている。

＊　第一学段（1－2年）
童謡と平易な古詩を朗読させ，豊かな想像力を膨らませる。初歩的な情感体験をさせ，言葉の美しさを感じさせること。

＊　第二学段（3－4年）
優秀詩文を朗読させ，作者の感情を体得させる。優秀詩文を50首暗誦すること。

＊　第三学段（5－6年）
優秀詩文を朗読させ，詩文の声調，リズムなどを通して作品の内容と感情を体得させる。優秀詩文を60首暗誦すること。

＊　第四学段（7－9年）
古代の詩文を朗読させ，その蓄積，体得と運用により，意識的に自らの鑑賞力と審美情趣を高める。注釈や辞書などの助けを借りて平易な文言文を読めること。優秀詩文を80首暗誦すること。

ここに見るように，義務教育段階の文言文指導は，朗読・暗誦活動を主にして行われている。特に小学生の子どもには，頭で考えさせることより，目と耳で作品を楽しませるほうが興味関心を引き学習意欲を向上させるのに効果的だと考えられる。中学生には朗読・暗誦をさせるうえ，さらに文言詩文の読解と古典文法の学習が求められる。感性の体得から理性の深化のように，目標達成の難易度が徐々に高まるように配置されている。

②「普通高中語文課程標準」（高等学校）

高校の場合，語文学習は「必修課程」と「選択課程」の二つに分けられている。また「必修課程」は「閲読と鑑賞」と「表現と交流」との二大領域に分けられているのに対して，「選択課程」は「詩歌と散文」「小説と演劇」「記事と伝記」などの五系列に分けられている。文言文教学はそれぞれ「閲読と鑑賞」と「詩歌と散文」の中に位置づけられて扱われている。具体的には次のように示されている。なお，番号は原典のものである。

一　必修課程　　閲読と鑑賞

8．中国の古代の優秀作品を学習し，その中に体現する民族精神を体得し，伝統文化に対する認識を積み上げていく。史的な立場から古代文学の内容と価値を理解し，民族の知恵を吸収すること。また現代の観念で作品を評価し，その積極的な意義と否定的・消極的な部分を見分けること。

9．注釈と辞書を参考にして，字句の意味と文章の内容を理解し，平易な文言文を読む力を身につける。常用文言実字・虚字・文型の意味と使い方を理解しその知識を整理することにより，新しい詩文を読む際に類推できること。古代詩文を朗読し，一定の量の名作を暗誦すること。

二　選択課程　詩歌と散文

2．（前略）歴史的観点と今日的観点で古代詩文の思想内容を考察し，妥当な評価を下すこと。

3．辞書と関連する資料を参考にして平易な古代詩文が読めること。一定の量の古代詩文の名作を暗誦する。古詩の形式と韻律についての基礎知識を習い，中国古代の文化常識を理解し，伝統文化に関する知識を豊かに蓄積すること。

高校生は小中学校の学習を通して，基本的な読解力を身につけている。そこで，高校の文言文教学は言葉・句法及び文章の内容を正しく理解させるだけでなく，作品に表れた作者の思想

や感情を的確に読み取らせ，古典素養を高めることに指導の重点を置いている。

2－2　国語科教科書から考える「漢文教育」

中国では長い間全国統一の教科書を使っていたが，80年代末に検定制の導入により，様々な教科書が登場してきた[6]。それによって教科書の分析は複雑な作業になってきたが，中国の語文教学の姿を捉えるには欠かせないものである。

基礎教育の課程改革では，「課程標準」に準じて小中高の新版教科書の編纂作業が行われた。ここでは，人民教育出版社が出版した語文教科書を分析の対象とする。半世紀以上に全国統一の教材として使われていたため，諸教材においてもっとも権威を持っており，分析の対象に最適であると思われる。

一冊の教材は6単元からなっており，1～4単元が現代文と外国文学で，5～6単元が文言文という構成が一般的である。文言文教材の割合は30％ぐらい占めている。各単元は平均5教材からなっており，精読教材と略読教材が区別されている。精読教材は，1教材につき2～3時間かけているのに対し，略読教材は一般に1教材につき1時間扱いになっている。

以下に小中高の教科書における文言文教材を表にまとめて提示する。「文言詩」と「文言文」に分類し，使用する学年，出版年月，作者を添えて並べることとする。

〔表1〕『語文』（第一冊～第十二冊）人民教育出版社小学語文室編　人民教育出版社

学年	教材	出版年月	文言詩		文言文
一年	第一冊	2003.10	静夜思・李白（盛唐）		
	第二冊	2003.10	所見（袁枚・清） 春暁（孟浩然・盛唐）	小池（楊万里・南宋） 村居（高鼎・清）	
二年	第三冊	2004.4	贈劉景文（蘇軾・南宋） 回郷偶書（賀知章・盛唐）	山行（杜牧・晩唐） 贈汪倫（李白・盛唐）	
	第四冊	2003.10	草（白居易・中唐） 望廬山瀑布（李白・盛唐）	宿新市徐公店（楊万里・南宋） 絶句（杜甫・盛唐）	
三年	第五冊	2004.6	夜書所見（葉紹翁・南宋） 望天門山（李白・盛唐）	九月九日憶山東兄弟（王維・盛唐） 飲湖上初晴後雨（蘇軾・南宋）	
	第六冊	2003.12	咏柳（曾巩・北宋） 乞巧（林傑・唐）	春日（朱熹・南宋） 嫦娥（李商隠・晩唐）	
四年	第七冊	2003.10	題西林壁（蘇軾・南宋） 遊山西村（陸遊・南宋）	送元二使安西（王維・盛唐） 黄鶴楼送孟浩然之広陵（李白・盛唐）	
	第八冊	2004.12	独坐敬亭山（李白・盛唐） 憶江南（白居易・中唐） 郷村四月（翁巻・南宋）	望洞庭湖（劉禹錫・中唐） 四時田園雑興（範成大・南宋） 漁歌子（張志和・中唐）	

五年	第九冊	2006.10	泊船瓜洲（王安石・北宋）　秋思（陸遊・南宋） 長相思（李白・盛唐）	
	第十冊	2003.6	牧童（呂岩・宋）　清平楽村居（辛棄疾・南宋） 船過安仁（楊万里・南宋）	
六年	第十一冊	2004.6	采薇（『詩経』）　春夜喜雨（杜甫・盛唐） 西江月（辛棄疾・南宋）　天浄沙・秋（白朴・元）	
	第十二冊	2006.12	古詩文暗誦単元： 七歩詩（曹植・三国）　芙蓉楼送辛漸（王昌齢・盛唐） 鳥鳴澗（王維・盛唐）　聞官軍収河南河北（杜甫・盛唐） 竹石（鄭燮・清）　江畔独歩尋花（杜甫・盛唐） 已亥雑詩（龔自珍・清）　石灰吟（于謙・明） 浣溪沙（晏殊・北宋）　卜算子送鮑浩然之漸東（王観・北宋）	学弈（『孟子』） 両小児弁日（『列子』）

〔表２〕『語文』　人民教育出版社中学語文室編　人民教育出版社

学年	教材	出版年月	文言詩	文言文
七年	七年上	2006.5	観滄海（曹操・三国） 次北固山下（王湾・盛唐） 銭塘湖春行（白居易・中唐） 西江月（辛棄疾・南宋） 天浄沙・秋思（馬致遠・元）	
	七年下	2004.12	課外古詩文暗誦単元： 春夜洛城聞笛（李白・盛唐） 滁州西澗（韋応物・中唐） 送霊澈上人（劉長卿・中唐） 江南逢李亀年（杜甫・盛唐） 峨眉山月歌（李白・盛唐）竹里館（王維・盛唐） 約客（趙師秀・南宋）　逢入京使（岑参・盛唐） 論詩（趙翼・清）　山中雑詩（吳均・南朝）	傷仲永（王安石・北宋） 夸父逐日（『山海経』） 両小児弁日（『列子』） *狼（蒲松齢・清）
八年	八年上	2003.6	詩三首（望岳・春望・石壕吏）（杜甫・盛唐） 帰園田居（陶淵明・晋） 使至塞上（王維・盛唐） 渡荆門送別（李白・盛唐） 遊山西村（陸遊・南宋）	桃花源記（陶淵明・晋） 陋室銘（劉禹錫・中唐） 愛蓮説（周敦頤・北宋） 核舟記（魏学洢・明） 大道之行也（『礼記』） 三峡（郦道元・南北朝） 答謝中書書（陶弘景・南朝） 記承天寺夜遊（蘇軾・北宋）
	八年下	2003.6	酬楽天揚州初逢席上見贈（劉禹錫・中唐） 赤壁（杜牧・晩唐） 過零丁洋（文天祥・南宋） 水調歌頭（蘇軾・北宋）	与朱元思書（吳均・南朝） 五柳先生伝（陶淵明・晋） 馬説（韓愈・中唐） 送東陽馬生序（宋濂・明）

			山坡羊・潼関懐古（張養浩・元） 飲酒（陶淵明・晋） 行路難（李白・盛唐） 茅屋為秋風所破歌（杜甫・盛唐） 白雪歌送武判官帰京（岑参・盛唐） 己亥雑詩（龔自珍・清）	小石潭記（柳宗元・中唐） 岳陽楼記（範仲淹・北宋） 醉翁亭記（欧陽修・北宋） 満井遊記（袁宏道・明）
九年	九年上	2003.6	望江南（温庭筠・晩唐） 江城子・密州出猟（蘇軾・北宋） 漁家傲（範仲淹・北宋） 破陣子・為陳同甫賦壮詞以寄之（辛棄疾・南宋） 武陵春（李清照・南宋）	陳涉世家（司馬遷・漢） 唐雎不辱使命（劉向・漢） 隆中対（陳寿・晋） 出師表（諸葛亮・三国）
	九年下	2003.6	关雎　蒹葭（『詩経』）	公輸『墨子』 得道多助，失道寡助（『孟子』） 生于憂患，死于安楽（『孟子』） 魚我所欲也（『孟子』） 惠子相梁（『庄子』） 庄子与惠子游于濠梁（『庄子』） 曹刿論戦（『左伝』） 邹忌諷齊王納諫（『戦国策』） 愚公移山（『列子』）

注：教材は精読教材と略読教材に分類され，「*」がついてある作品は略読教材である。以下同様。

〔表３〕『語文』 人民教育出版社中学語文室編　人民教育出版社

学年	教材	教材名		
		出版年月	文言詩	文言文
高一	第一冊	2004.12		蘭亭集序（王羲之・晋） 赤壁賦（蘇軾・北宋） *山中与裴秀才迪書（王維・盛唐） *遊褒禅山记（王安石・北宋）
	第二冊	2003.10	渉江采芙蓉（『古詩十九首』） 短歌行（曹操・三国） 帰園田居（其一）（陶淵明・晋）	氓・采薇『詩経』） 離騒（屈原・戦国） 孔雀東南飛（漢楽府民歌） 燭之武退秦師（『左伝』） 荆軻刺秦王（『戦国策』） 鴻門宴（司馬遷・漢） *召公諫厉王弭謗（『国語』）
高二	第三冊	2006.10	蜀道難（李白・盛唐） 琵琶行（白居易・中唐） *錦瑟　馬嵬（其二）（李商隠・晩唐） 秋興八首（其一）　咏懐古跡（其三）	寡人之于国也（『孟子』） 蔫学（『荀子』） *過秦論（賈誼・漢） *師説（韓愈・中唐）

			登高（杜甫・盛唐）	*六国論（蘇洵・北宋）
	第四冊	2004.6	望海潮・雨霖鈴（柳永・北宋） 念奴娇・赤壁懐古　定風波（蘇軾・北宋） 水龍吟・登建康賞心亭 永遇楽・京口北固亭懐古（辛棄疾・南宋） *酔花陰　声声慢（李清照・南宋）	廉頗藺相如列伝（司馬遷・漢） 蘇武伝（班固・漢） 張衡伝（範晔・南朝） *李賀小伝（李商隠・晩唐）
高三	第五冊	2003.6		帰去来兮辞（陶淵明・晋） 滕王閣序（王勃・初唐） *逍遥遊（庄周・戦国） *陳情表（李密・隋）
	第六冊	2004.10		

〔表１〕に見るように，小学校の文言文教材は李白・杜甫・白居易を中心とする，人々に愛誦されてきた唐詩が多い。色彩が豊かな作品が多くあり，子どもたちにイメージを持たせやすい。〔表２〕の中学校の教材は「詩」と「文」をバランスよく取り上げている。一方，高校の場合は，思想性・論理性が強く，内容が難しい作品を多く取り入れる傾向が見られる。〔表３〕の高校１年は散文を主にし，引き続き易しい文言文を読む能力を育てることに重点を置く。高校２年と３年の教材には文学作品を多く取り入れ，文学作品の鑑賞と評価の指導を重点的に行う。

以上の調査結果から文言文教材の特徴をまとめてみると，次の二点が指摘できる。

第一点目は同一作者の複数の作品を取り上げられていること。

例として李白の作品を見ると，小学校では６作品，中学校では４作品が収録されている。杜甫の作品は，小学校では４作品，中学校では５作品，高校では３作品となっている。また，陶淵明の作品は中学校で４作品，高校で３作品が取り上げられている。学習の連続性・積み上げには有効であると考えられる。

第二点目は教訓的内容，思想性がある教材が多く見られること。

中国では，教師の役割を「教書育人（知識を教え，人を育てる）」という。つまり，知識の伝授だけでなく，良い礼儀と道徳を身につけさせることも教育の大きな目標である。こういう伝統的な理念のもとで，「課程標準」の「総目標」では，「語文は最も重要なコミュニケーション手段であり，人類文化の重要な部分である。工具性（コミュニケーション）と人文性（文化）の統一は語文課程の基本特徴である」ことを大きく打ち出している。また「教材編纂の提案」では，表現も思想性も優れていることを教材選定の基準として示している。例えば，陶淵明の作品が多く取り上げられている理由は，田園詩人としてその詩の文学的価値が高いことはもちろん，それと同時に作者は志を得ることなく，俗世に対して大きな不満と鬱懐を抱えていることにより，江南の好風景は現実社会の暗黒と対照的になるという教訓的内容にもあるだろう。

2－3　試験問題から考える「漢文教育」

中国では，「高考」（大学入学統一試験）が，一部地方を除いて，毎年6月7，8，9三日の日程で全国で一斉に行われる。日本よりも学歴が重視される中国では，「高考」は生徒たちの将来を左右する大事な試験のように見られる。教科書の編集と同じように，出題はもともと全国共通であったが，地域差と学力差に対応して，2000年から各地方が出題するようになった。

「2006年普通高等学校招生全国統一考試大綱」[7]では，易しい文言文を読む能力が考察の目標であることが明確に示されている。また，文言文の読解力を三つのレベルに分けて示している。

1．理解
①常用文言実詞の文における意味を理解すること
②常用文言虚詞の文における意味を理解すること
③現代語と違う句法と用法を理解すること
④文の意味を理解し現代語に翻訳すること
2．分析総合
①文から必要な情報を読み取ること
②作品内容の要点と中心を捉えること
③作者の見方と意図を分析してまとめること。
3．鑑賞評価
①文学作品の形象・言葉・表現を鑑賞すること
②作品の思想内容や作者の見方と意図などについて評価すること

「理解」は文言文読解における言語面の理解力を重点的に考察する。「分析総合」は主に文言作品の内容と思想を分析し総合的に概括する能力を考察する。「鑑賞評価」は理解と分析総合を踏まえて，さらに作品の内容と表現，作者の考えと意図を鑑賞し，的確に評価する能力を考察することで，難易度が最も高い考察項目である。

ここ数年の全国版及び各地の試験問題を調べることにより，出題される文章には人物伝記が圧倒的に多く，また，文言文の出題は大問4題で約30点，満点150点の20%ぐらいを占める比率で定着していることがわかる。設問の形式は，重要単語と基本句形についての文法知識の問題，文章の意味を正しく読み取るかどうかを考察するための四択式の問題または文章の大意を現代語でまとめさせる問題，文言文を現代語に翻訳させる問題，短い文章を読んで，作者の気持ちと考えに対する受験生の意見や評価を問う問題がよく見られる。

2007年度全国版の語文高考の試験問題における文言文部分の出題は，例年通り，大問4題の問題構成で32点で，大きな変化が見られなかった。一方，北京市・上海市・江蘇省・広東省などを代表とした地方版の出題に目を向けると，いくつかの変更点が見られる。一つは，文言文に関する出題は語文全体に占める比率は，やや高くなったこと。例えば，上海市の場合，文言文部分は合計42点で，全体の28%まで占めている。今一つは，文学作品を試験問題に取り上げ，出題の範囲が広げられたこと。例えば，広東省の出題では怪異小説の代表作『聊斎志異』（蒲松齢・清代）の中の一篇を読解の材料として取り上げられた。これによって生徒たちが普段注目する題材は人物伝記にこだわらず，視野を広げてさまざまなジャンルの文章を楽しむことが

できる。最後にもう一つは，新たな設問の形式を導入したこと。例えば，句読点の施されていない文章（白文）を「／」で区切らせる問題（「文言断句」という）が2007年のいくつかの地方版の入試問題に出てきた。古人の書いた原文を正確に区切ることができるかどうか，受験生の読解力と文言語感が問われる。そのほか，倒置文，省略文，受動文，判断文など，現代文と異なる句法と用法に関する出題も見られた。

以下に実際に2007年度北京市の入試問題における文言文の出題を紹介する。各問の概要と，代表的な大問及び配点を示す。

大問１　文章の読解（15点）

出典は前漢の淮南王劉安が編纂した『淮南子・泰族訓』である。従来の人物伝記のジャンルから抜け出して，散文が出題された。字数は約450字で，平均的な分量であった。本文の下に注釈が三つ提示されていた。治身と治国についての抽象的な内容ではあるが，理解するには難解とは思われない。問題は以下の５問からなっている。

ⅰ．文言実詞に関する問題。点がついた実詞の意味を正しく理解していないものを四つの選択肢から一つ選ぶ。例えば，「法弗能正也」の「正」は，ここは動詞「正す」（動詞）の意味で使われているため，「正確」（形容詞）と理解することはできない。

ⅱ．文言虚詞に関する問題。四つの選択肢はそれぞれ二つの文からなっている。点がついた虚詞の意味・用法が同じ項目を選ぶ。この問いの正解は「庶績咸熙」と「少長咸集」の「咸」という字で，この二文では「みな，すべて」と訳すものである。

ⅲ．選択肢に挙げられた四つの省略文において，省略された部分が正しく補足されていない文を選ぶ。この設問は新しく出てきたものである。主語・動詞・目的語・接続詞などさまざまな省略があるため，省略されている部分を正しく補足するにはかなりの文法力と語感が要ると思われる。

ⅳ．文章内容の理解と分析の問題。六つの文を三つずつに四つの選択肢に配置された。その中から礼儀を重んじる思想を直接に反映している項目を選ぶ。正解を見つけるには全文の意味を理解するうえ，それぞれの選択肢の理解も大事である。受験生にとって難問となった。

ⅴ．内容合致の問題。本文の内容と一致していないものを選ぶ。選択肢が簡潔な言葉で書かれたため，文章の内容を理解できれば，正解が選ばれるものと思われる。

大問２　文言断句（５点）

出典は司馬光の『資治通鑑・唐紀八』であった。本文の内容は比較的平易なもので，二三回ぐらい読めばわかるはずである。ただし，どこで区切るべきか，語感を問う問題で，簡単にはできないと思われる。

大問３　詩を鑑賞する問題（７点）

出典は『詩経・周南』であった。本文の下に注釈が七つつけられている。また，「この詩は女の人たちが食用野生植物を採集するときに歌った民歌である」と詩の大意も提示されている。

ⅰ．修辞についての問題。『詩経』は表現上に賦・比・興という３つのスタイルがあるが，この詩はどの修辞法を使っている

のかという問題であった。

ii．内容理解の問題。この詩は野生植物を採集していた労作過程を生き生きと表現しているが，具体的にはどう描かれていたのか。解答欄は二行とされていたため，やや長い解答が望まれるかと思われたが，正解は「動詞の変化によって表現される」という短い文であった。

iii．この詩を読んだ感想を書かせる問題。この詩を繰り返し読んでみると，どんな場面が想像できるのか。参考答案として「女の人たちが畑で仕事をしながら歌を歌っていて，明るく元気に働いている様子が想像できる」が挙げられる。簡単にまとめれば良い問題で，正解率は高かった。

大問４　名作名句を書かせる問題（６点）

受験生が文言詩文をどれぐらい覚えているのか，空欄補充の形で考察する。四つの文から任意の三つを選んで文を完成させれば良い。中国で朗読・暗誦が盛んに行われているのは，名文を空で書かせる問題が必ず出題されることも大きな理由であろう。

以上，2007年度北京市の高考入試問題を分析した。北京市の出題は難易度が全国において平均レベルにあたる。設問の不足点と言えば，選択問題が多く，受験生に自分の理解や評価を書かせる問題が比較的少ないことが考えられる。「考試大綱」により，「鑑賞と評価」は受験生に求められる文言読解力の一つではあるが，実際に出題されることは少ない。これからもっと良質の問題の作成が期待される。

3　中国における「漢文」の指導実践例――上海の高校の場合

2006年12月に，早稲田大学教育学部の教員が上海に行って小中高校の語文教育の視察を行った。わたくしは通訳として同行した。そこで，復旦大学附属中学（高等学校）で高校二年生の古典授業を参観した。この高校は上海においていわゆる「重点学校」（モデル校）であるため，先生も生徒も一般の高校より若干レベルが高い。

教材は唐宋八大家の一人である柳宗元の散文「始得西山宴游記」（始めて西山を得て宴游する記）であった[8]。作品に描かれている自然美と作者の気持ちを体得させることは授業の目標となった。教材はＢ５版３頁で，タイトル・作者名・読みの提示・本文・注釈からなっている。すべて横書きで，簡体字で表記されている。本文の字数は367字であるのに対して注釈は47ヶ所もある。高校生にとっても文言文はこれほど細かい注釈がなくては理解できないことがわかる。

以下，授業経過の概略を紹介し，考察を加えたい。

①教師がタイトルと作者名を板書して，今まで習った柳宗元の作品を復習する。

＊作品における暗記を求める部分を全員でそらんじる。

＊作品の「字眼」を板書し，問答を通して作品内容の確認と復習を行う。

②今まで習った柳宗元の山水作品について復習する。

＊山水作品の特徴を「山―幽静，水―清雅，境―空寂，情―哀憫」にまとめて板書した。

＊水・山・境・情に関わる名文を回想して答えさせる。教師は適切な解説を加える。

③教材本文への導入をする。

＊難読漢字の発音を確認する。

＊本文教材を斉読させる。

＊読み間違った字の発音を確認する。

④第一段落についての読解。

＊重要動詞について意味を確認する。

＊難しいと思われる文を現代語に訳させる。

＊この段落で作者の生活と精神の状態を反映している文はどれだと教師が発問する。

⑤第二段落についての読解。

＊第二段落を速読して，「西山」の特徴の「怪特」は具体的にどう描かれているのかを考えさせる。

＊「怪特」を描く部分を斉読させる（生徒それぞれの理解が異なるので斉読はそろわなかった）。教師は解説を入れる。

＊「怪特」について生徒たちにわかりやすい言葉で自分の理解を発表させる。

＊この段落の後半部分を斉読させる。作者の心情を表した「字眼」を探して検討させる。

⑥解題。

＊「始得」の意味について話し合わせる。

⑦本文を斉読させる。

⑧本時の学習内容を確認させ，次時の学習事項を伝える。

＊作者の心情を「心—特立」と概括して，理解を深める。

＊ほかの作品における作者の心情を表した詩を板書した。宿題は詩の意味を理解して暗記すること。

授業の展開は，まず作者や作品に関連する内容の復習（暗誦させるまたは文章の理解を述べさせる）から始まり，これから学ぶ教材を朗読させ（難読漢字発音の確認，教師が範読，指名朗読，斉読など），作品の背景とテーマの理解，段落ごとに文法や内容や思想の理解，最後に作品理解を深める上で，さらに生徒に朗読させたり，暗唱させたりする，という流れであった。高校の古典の授業の様子を代表する一般的な授業だと思われる。わたくし自身も実際に同様の授業を受けてきた。今度，再び古典の授業を体験するに当たり考えたことは二つである。

一つ目は，朗読・暗誦学習が授業に多く取り入れられること。漢詩は韻文なので繰り返し声に出して読むことにより，文体のリズムを体感することができる。むろん，古代音で発音することは現代中国人にとっては不可能なことであり，文言文はすべて現代中国音（普通話）で読むこととなる。授業時間の三分の一以上が朗読の時間であることから，古典の授業は読みに始まって読みに終わると言っても過言ではない。また中国では，教師は範読して聞かせることが多い。抑揚をつけたり間を空けたりして読むことで，生徒たちの文章理解を助ける。一方，生徒たちは暗誦が得意であることは，今度の授業参観を通して実感できた。一斉暗誦を要求された時，声を揃って朗々と暗誦していた生徒たちの様子を見ることができた。

二つ目は，作者の心情を表す言葉または作品を理解するためにキーワードを重視すること。すなわち教師が作品の内容や作者の気持ちなどを言葉にまとめて理解させることである。授業を始めた際，教師は以前習った作品の「字眼」を四つの言葉にまとめて板書した。その言葉が文章における位置・意味を確認させ，生徒たち

に自分の理解を発表させた。また，柳宋元の山水作品に描かれた「山，水，境，情」は，それぞれ二文字の語彙でその特徴を表すと，「山—幽静，水—清雅，境—空寂，情—哀憫」となる。抽象的な描写をいくつかの言葉によって凝縮して表現するのが中国の国語教育の特徴である。こうした凝縮されたキャッチフレーズから作品の全貌を推察することができる。

参考として，高等学校の「語文課程標準」における文言文指導に関わる内容を紹介する。

まず，「必修科目教学の提案」では，次のような内容が述べられている。

> 古詩文の閲読は，辞書などを用いて読解中の難点を自ら解決するように指導するべきである。文言常識の指導は少ないながら質の高い内容を目指す。生徒たちの古詩文の読解力を高めることが目標である。古代の優秀な散文と詩歌を一定の量まで読ませる。朗誦に興味関心を持たせ，一つの習慣として身につけさせる。

また，「（六）　選択科目の設計と教学」における「詩歌と散文の教学」では，次のような内容が述べられている。

> 本系列の課程は，一定の読書量の上で，重点を精選し，鑑賞と評価をしながら読むべきである。
>
> 生徒たちの読みと鑑賞をサポートするには様々な方法がある。例えば，詩文の朗誦を強調し，朗誦を通して作品の雰囲気と形象を感受し体験させ，品性を陶冶し審美する情趣を高める。授業の補助的手段としてメディアを運用し，生徒たちの理解と感受を助ける。教員は作家や作品に関わる必要な資料を用意する，または生徒たちに本やインターネットを通して資料を調べさせ，作品に対する理解を豊かにさせる。詩歌や散文の創作活動に興味を持たせる。
>
> 作品を読んだ後の鑑賞活動を重視する。作品に対する個性的な読みを尊重し，生徒たちの想像力と創造力を大事に育てる。鑑賞の方法と文学史の知識を系統的に指導する必要はない。
>
> 詩歌と散文の朗誦会を開き，文学サークルを作り，文学刊行物を刊行する。学校内外の新聞・雑誌に積極的に投稿するよう指導する。

4　日本の漢文教育への活用を目指して

以上の諸点を踏まえて，日本の漢文教育の衰退に歯止めをかけるために，以下の三点を提案したい。

第一に，教師自身の漢文に対する意識を高める必要を感じている。漢文を学ぶ生徒たちは，教師の姿勢によって大きく影響されている。漢文担当者は国文学科・日本文学学科の卒業生が大部分を占めており，漢文学・中国文学を専攻してきた卒業生は少ない。教師自身が専門家ではないことより，当然生徒たちの漢文嫌いを生産するばかりである。そこで，まず教師が漢文という教科の特質を認識し，身につけなければならない知識の習得に努めるべきである。それによって，漢文の魅力を生徒に伝えてほしい。わたくし自身が中学校・高校時代に古典素養が優れている恩師に恵まれた。教師の美しい朗読と内容豊かな解説とともに，漢文への熱意が無意識のうちに生徒たちの心に伝わってきた。漢文は言葉・文法から作品の思想・内容まで現代文と大分異なる（日本の場合はまったく異質な

ものである）ため，教師の指導が不十分なら，生徒たちが漢文の学習に意欲的に取り組むことが困難である。この意味では漢文を担当する教師は，現代文の教師よりもっと重要な役割を果たしていると言えよう。

第二に，「朝の読書」について，「黙読」させるより「音読・朗読」をさせてはどうかと提案したい。授業前の10分間，児童・生徒と教師の全員が自分の読みたい本を自由に読む読書活動で，静かな「黙読」で一日をスタートさせることは，学習の構えを作る重要な時間になるという。一方，中国では，児童生徒の音読朗読の時間を保つために，毎朝特別な朗読時間が設けられている。ほとんどの小中高校では，始業前の20～30分間が定例の朗読時間である。自分の好きな文章（ほとんどは教材であるが）を自由に朗読することができる。児童・生徒たちには，「黙読」で落ち着かせるより，むしろ声高く読み上げることで，頭も体も活性化した状態で授業に向かわせるほうが，知識の吸収が早いと思われる。気楽な雰囲気で授業知識の復習と課外知識の習得ができるため，学習者の興味・関心を喚起することに大きな役割を果たしている。

第三に，名詩名文を「暗記」させるだけではなく，「暗誦」までさせること。中国では「暗誦」のことを「背書」という。昔の塾で教師が学生に暗誦させる時，書物に背を向けさせて内容を読み上げさせるという意味からだという。朝の朗読時間に朗読そのものより，声に出して読むことにより文章を暗記する意味合いが強い。頭で覚えるより，体で覚える「身体記憶」のほうが効果的で長く覚えられる。頭の中に優れた文の「音声メモリー」が作られ，日常の会話に場合にふさわしい文を考えずに自分の言葉として自然に出るようになると考えられる。今の日本では，若者の会話は，語彙が貧弱，表現が拙いとしばしば批判されている。優れた詩文を暗誦することによって，表現を豊かにすることができる。特に小学生の頃は人生の中で最も記憶力が発揮できる時期であり，適当な反復練習をさせることによって，子供の記憶力を伸ばして高めることが期待できる。児童・生徒たちに意欲的に暗誦に取り組んでもらうために，もっと工夫を凝らしてほしいものである。

むろん，漢文教育の改善を図るには，最も大事なのは社会全体が漢文教育に対する関心と重視を喚起することである。漢文教育の意義をもっと深く認識しなければならない。漢文学習の必要性が社会に認められない限り，漢文教育における本格的な改善が期待できない。教師たちが教授法そのものの改善にいくら工夫を凝らしても，隔靴掻痒に過ぎない。中国の古典教育も「古典無用論」の危機に直面している。ただし，日本と違うのは，中国の教育部はこの問題を重視して，新しい『大綱』と『課程標準』で古典の分量を増やしたのである。

5　今後の課題と展望

2002年に国立教育政策研究所で実施した高等学校教育課程実施状況調査により，「古文は好きだ」「漢文は好きだ」という問いについての結果は，七割以上の生徒が「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」と否定的な回答をしており，古典に対して興味・関心を持っていない生徒が大半を占めていることがわかる。

一方，中国では，生徒と教師の古典学習に対する意識を明らかにするために，上海市洪山中学の語文教師によるアンケート調査が実施され

た。調査対象は重点中学及び一般中学の中学生300名と中学語文教師150名[9]であった。一部の調査項目と結果は以下のようである。

①古典について興味を持っているか

37.7%の生徒は語文教科書において最も興味を持っていないのは古典だという。

32%の教師は生徒たちが最も興味がないのは古典だと思っている（ちなみに，52%の教師は作文だと思っていた）。

興味を持っているかどうかは学習の原動力の一つである。三割から四割ぐらいの中学生は古典に興味を持っていないことは，現在の中国の古典教育の苦しい立場を反映している。そして，もし古典に対する好き嫌いを直接に選ばせるなら，「好きではない」「どちらかと言えば好きではない」と否定的な答えを出す生徒の比率がもっと高くなる可能性が考えられる。

②指導の目的と方法について

古典の学習について，42%の生徒は作品の大意を理解できる程度で良いという。24%の生徒は音読・朗読を主な学習手段と考えている。33%の生徒は語彙と言葉の学習に重きを置くべきだという意見であった。

一方，教師の場合は，36%は語彙・言葉・文法の細かい分析指導を主に行うべきだといい，22%は音読・朗読に重点を置くべきだと主張した。それ以外は具体的な作品よってそれにふさわしい指導を行うべきだという。

③古典学習の意義について

72%の生徒は今後の学習や生活に役立つと思っている。そのほかの生徒は受験のために古典を習っている。

教師の場合は，54%は生徒たちの語文総合能力を高めるのに非常に大事だと思うのに対して，46%は若干役に立つと考えている。

上述の調査結果により，中国の中学生は古典学習の意義について肯定的な態度を持っているが，その学習に対して興味を持っていない，積極的に学ぶことができないことが明らかになった。

確かに，中国では古典（特に詩）が日常生活に溶け込んでいる。会話の中に有名な詩文の一節がしばしば出てくる。町で見かける店の看板の文句が見事な絶句であったり，学校や工場に掲げられたスローガンが四文字の韻文であったりすることはめずらしくない。古人の詩句が巧みに現代に応用され，リズムや簡潔性を持つ古詩古文は現在でも実用性のあるものである。

しかし，文言文は書面語として，口頭語とは相当異なるため，現在では文言文で文章を書かせることはほとんどなくなり，学習者に求めるのは「読む」ことに限定されるのが現状である。古人の優れた詩文，伝統的な言語文化を守る意味で古典の学習が続けられている。

漢詩漢文を習うことにより，漢詩漢文を読む能力を養うとともに，ものの見方，感じ方，考え方を広くし，古典に親しむことによって人生を豊かにする態度を育てる。これは，日本でも中国でも共通した漢文教育の目標である。「以古為鏡」（古を以って鏡と為す）という言葉の通り，歴史を知り・歴史で知ることが大事である。生徒たちに自ら歴史をたどる方法，つまり漢詩漢文を読む力を身につけさせることが重要なのである。日本でも中国でも今後漢文教育が盛んに行われることを期待している。

＊本稿は2007年４月28日の早稲田大学国語教育学会第231回例会「漢文教育の内と外」におい

て「中国における漢文教育―上海市内の高校視察をふまえて」と題して発表した内容に基づいてまとめたものである。なお，本稿における中国語の日本語訳は筆者自身による。

注

1　日本で漢詩・漢文のことは中国で「文言詩文」（文語文）と呼ばれる。文言とは，先秦の言語を基準とした古代漢語の書面語であり，中国の古典文学の主な文学言語である。文言は「白話」（口語）に相対する用語である。白話とは，唐宋以来の口語古典を基礎に成立した，現代漢語に近い現代漢語の書面形式である。唐宋明の時代に数多くの白話小説や話本が書かれたが，文言文の範疇には入らない。

2　1999年に中国教育部（日本の文部科学省に相当）により「基礎教育課程改革綱要（試行）」が発布され，小学校・中学校・高等学校を対象にした基礎課程改革がスタートした。2001年７月に「全日制義務教育語文課程標準（実験稿）」（小学校・中学校），2003年３月に「普通高中語文課程標準（実験稿）」（高等学校）が発表され，これまでの「語文教学大綱」の代わりに国語教育の目標，内容，方法などを詳しく規定する。数年間の実験期間を経て，2005年度からすべての小中学校は新課程に入っており，高等学校の方は2007年度から全面に新課程を導入することとなっている。

3　注２を参照。

4　「課程標準」は，知識と技能，課程と方法，情感態度と価値等の方面についての基本要求を規定したもので，各教科の性質，到達水準及び内容を規定し，教科の性質と地位，課程目標，過程内容及び各学年の過程内容の編成を核心内容としている。日本の「学習指導要領」に当たり，中国の語文教育の根幹的役割を果たしている。

5　「2000年版高考语文科考试说明」（2000年版大学入学試験語文科についての説明）によると，「平易な文言文」の基準は以下の通りである。

ⅰ．漢字と言葉　作品に使用されている漢字と言葉は常用，次常用であること。

ⅱ．文の文法と構成　常用の文言句法を使うこと。

ⅲ．ジャンル　叙事文を主として，その次は風景を描写した文章・叙情文・説明文及び論理文である。専門性が高い学術著作は含まれていない。

ⅳ．内容　普通知られていない古代の文化常識と文化背景が少ない。典故が少ないこと。

ⅴ．風格　典範的な文言であること（古代白話を含まない）。

なお，劉国正が『実和活：劉国正語文教育論集』（人民教育出版社出版　1995.7）という著書で，次の四つの作品を「平易な文言文」の代表として挙げた。『孟子』，『史記』における伝記の部分，『夢渓筆談』，『聊斎志异』。

6　従来，小学校・中学校・高等学校の教科書は，「語文教学大綱」の基準に基づいて，人民教育出版社（国家教育部の直属機関）が全国共通の国語教科書を１種類だけ作成していた。しかし，各地域の多様な需要や，生徒の多様な学力に対応するため，1980年代後半から，教科書を多様化する改革が進められた。教材検定の機関として，1986年に「全国小中学教材検定委員会」が設置された。こうして従来一体化した編集機関と検定機関が二つに分けられることとなっている。現在では，各機関または個人が「語文課程標準」に準じて，執筆・編集した教科書が検定委員会の審査を経て，各学校で使用されている。特に，1993年秋から九年制義務教育の全面実施と2001年７月から基礎課程改革の推進により，現在では，語文教材の改革は各方面から模索と実践が始まり，各種の実験語文教材が各地域で使用されている。ただし，人民教育出版社は引続き教科書の編纂を行っている。

7　「考試大綱」は大学入学試験の出題に関わる法定の文書である。教育部及び各省市における入試センターが出題する際に厳格に守らなければならない。
http://www.neea.edu.cn/rxks/ptgk/infor.jsp?infor.jsp?infoid=13825&class_id0=03&class_id1=03_06&class_id2=（中国教育考試綱なお，URL は2007年現在のもの）

8　柳宗元は永州に左遷された十年間に，政治上の不満と挫折の憂いを山水に晴らし，自然美を歌う山水紀行を数多く作った。その中に「永州八記」が一番よく知られている。「始得西山宴游記」はその一篇である。

9　http://www.hshsh.pudong-edu.sh.cn/info/info_detail.jsp?infoId=info08000000963
「中学生古文学习能力和古文教学的现状与思考」（「中学生の古文学習能力と古典教育の現状及び考察」なお，URL は2007年現在のもの）